

公開空地による国際交流、POPS シンポジウム開催！ POPS(Privately owned Public Spaces) symposium was held!

2月28日(火)に工学部14号館にて、本研究室のChristian Dimmer 特任研究員と黒瀬武史助教が中心となり「国際シンポジウム：POPS -Places,People,Policies,Processes」が開催されました。

text_muramoto



▲国内および様々な国々の専門家による討論風景

POPS シンポジウムとは？ -その概念と目的- What is POPS symposium? -The concept and purpose of the symposium-

特任研究員 Christian Dimmer

The quality of life in our cities depends largely on the quality, availability, accessibility, and social inclusiveness of public space. Space of public interacting is today produced through varying and ever more complex management arrangements between diverse government authorities, civil society groups and the corporate sector. It is precisely this presence of multiple spatial and managerial arrangements that influence the relationship between public and private spheres in contemporary urban space and predicates the complex ways citizens interact —yet these spaces and the deeper implications of their existence in increasing numbers is only little understood.

In many cities worldwide incentive planning instruments have produced so-called **Privately Owned Public Spaces (POPS)** -planned, produced, managed and controlled through the private sector. In order to utilise the rich experience cities as diverse as New York, Santiago de Chile, Melbourne, Berlin, Taipei, Bangkok, or Tokyo have

made over the last decades, the first international POPS seminar on February 28th brought together international public space researchers with eminent Japanese planning thinkers. The aim is to develop a platform for an internationally comparative research project, analysing the varying arrangements that produce publicly usable spaces through private actors in different socio-cultural contexts and to facilitate knowledge building between practitioners and academia.



▲高層化とのトレードオフで生み出された東京のPOPS



▲東京にある多くのPOPSにおいて積極的な活用がなされていない

発表を終えて感じたこと

After the presentation of the thesis at the symposium

text_maekawa

2月28日(火)に東京大学で行われた公開空地シンポジウムで、修士論文の内容を発表する機会をいただきました。わたしのテーマは東京において人々の居場所として見出されるような「privately owned interior spaces」についてだったのですが、初めての英語での発表であったこともあり論文審査会とは違う緊張がありました。

英訳の過程では、改めて自分の論文を見直すこととなり、良い機会となりました。シンポジウムには、各国の研究者や行政の方々などが集まり自国のパブリックスペースの現状などについて話し合ったほか、途中には「パブリックとは何か？」というような議論も飛びだし、とても充実したシンポジウムでした。



▲修士論文の内容を英語にて発表を行う前川

新年度直前拡大号！

コラボ企画！マガジン対談

Collaboration with Tourism Magazine in Tokyo Metropolitan University

text_muramoto

首都大学東京「ツーリズムマガジン」編集部が都市デザイン研究室を訪れ、双方の研究室の活動やマガジンによる情報発信についてなど、様々な議論を行い、交流を深めました。

首都大ツーリズムマガジンとは？

首都大学東京観光科学域の大学院生の有志によって作成され、研究室単体ではなく、学域全体の活動を発信している情報誌。本マガジン編集委員が創刊のきっかけを作ったことから都市デザイン研究室マガジン(UDLM)の姉妹誌であるとも言える！？



▲ツーリズムマガジン
…コンセプトは「旅に出たくなるマガジン」かわいくオシャレで楽しい誌面です！

祭りの調査で佐原に行ったとき、都市デザイン研の方からマガジンについて伺い、「私たちもマガジンをつくらう！」と思い、2011年8月に創刊。月1回のペースで発行しています！現在はフォーマットの確立と1号でも長く続けることを目標にがんばっています！



▲ツーリズムマガジン編集部のみなさま
…左から平河内編集長・岡村先生・杉原編集員。写真には写っていませんが爽やかな井上編集員も来ていただきました！

ツーリズムマガジンを見た編集員の反応は？

一同全員あまりにもかわいい紙面に釘付け！そして都市デザイン研マガジン(UDLM)と比べてこんな意見が…



大森編集員

女の子テイストの誌面で、まさに旅に出たくなるマガジン。UDLMの編集は「作業」になりがちかもしれない。



松本編集員

まさに「マガジン」という感じ。UDLMは情報の羅列でマガジンというよりも壁新聞のテイストが強いのかも…



石井編集員

誌面の自由度が高く、面白そう。UDLMはレイアウトがしっかり決まっていて、編集者の自由度が低い。



北川編集員

オシャレで読みやすいが、つくるのが大変そう。ただ、あれこれ決まっていなくて作りがいがありそう。



村本編集員

文章量はあるが、小見出しがついているので読みにくさを感じない。UDLMは少し型にはまりすぎて目新しさが無い。



黒瀬助教

雑誌テイストでレイアウトに工夫がされており、見ようという気になる。UDLMは正直読み飛ばす部分が…

ツーリズムマガジンの苦勞とは？

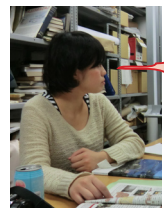
UDLM 編集員(特に女子)の心を驚掴みにした自由度が高く、オシャレなデザインで雑誌らしさのでているツーリズムマガジンですが、編集時にはなかなか困難が続きまとうようで…？

1からつくるといって、UDLM 初代編集長の酒井さんにアドバイスをいただいて「ツーリズムマガジンなのだから旅に出たくなるようなマガジン」というコンセプトが決まりました。

それから試行錯誤の連続で、レイアウトのフォーマットがなかなか定まらなかったり、依頼記事がなかなか来なかったり、あまり面白くなかったりと日々頭を悩ませています…



平河内編集長



杉原編集員

自由度が高いという聞こえはいいのですが、まだ文字の大きさ、写真などと文章の比率など、どのようにすれば見やすい誌面になるのかは手探り状態です…そして編集にとても時間がかかってしまいます。女子編集員が多いのでどうしても誌面が女子テイストになってしまったり。…あと先生のチェックが厳しいんです(苦笑)

マガジン対談を通して

レイアウトのセンスや自由度などUDLMとはまったく違ったかたちのマガジンを見て、研究室「マガジン」として本誌に足りない点、改善すべきポイントなどがそれぞれの編集員の中で色々と思い浮かんだようで、「紙面の1/4くらいは各自が自由にレイアウトできるようにしてみてもどうか？」「プロジェクト報告の記事ごとの分量を増やして、概要ではなくもっと踏み込んだ内容を発信することはできないだろうか？」など、UDLMのより一層の紙面充実・内容向上のための議論が盛んになされました。一方で、これまでの先代編集者の方々が築き上げてきたUDLMの試行錯誤の歴史によって自分たちの編集がいかに楽であるかということも再認識できました。

ツーリズムマガジン編集部の方も、どのようにこれから自分たちのスタイルを作り上げていくかのヒントを得られたそうで、今回のマガジン対談によっておたがいのマガジンがより充実するのでは!?という期待に胸がふくらみました。今回のコラボ企画を持ちかけてくださった平河内編集長・ツーリズムマガジン編集部のみなさま、本当にありがとうございました！

なお、ツーリズムマガジンは<http://www.ues.tmu.ac.jp/tourism/updates.html>にアクセスして見ることができます！

リガと東京の不思議な類似性

Riga and Tokyo : subtle resemblances

第16弾となる留学生コーナー！今回はバルト3国のひとつ、ラトビアからの研究生イルーゼさんにラトビアの首都であるリガと東京の subtle resembles について語っていただきます！

Immediate experience of Tokyo and Riga – the places I have lived, triggers many contradictory associations about differences between Eastern and Western cities. Tokyo has become a magnifying glass to see some hidden dimensions of the urban processes in my home country, Latvia. Twenty years after collapse of the USSR and re-establishment of independence, Latvia is struggling to condense its identity by all possible means – preservation of language, knowledge, traditional urban heritage and nature. Tokyo, behind being epitome of continuous changes, can also be traced in a sensible and intuitive mode of memories about the centuries behind its modern development. Exactly the sensitive experience can be seen as an extraordinary resemblance between Riga and Tokyo. However, attitudes to processes, which form the character of the cityscape, are rather different. Tokyo has eroded almost all of my theoretical and practical knowledge,

what is accustomed model of a city in the West – carefully considered sequences and continuity of spatial relationships, importance of contextual wholeness and value of memories, past and identity as solid built structures. The character of Tokyo is continuously under flux. Memories of what Tokyo used to be are gradually being erased and replaced with new structures, without a trace of the past. Traditional land division, proportions and rhythm of spaces and building craft seem to become an exceptional phenomenon in the city and also rare knowledge.

On the contrary, the character of cities in Latvia is continuously under preservation. For instance, the heritage of wooden architecture is seen not only as monuments, but also as a live, integral part of contemporary Riga and rural areas. It has become a whole socio cultural process to preserve and adapt those structures to the needs of a contemporary city. The attempts are

based not only in the policies of the heritage preservation, but also in the initiatives of local communities. Thus, I question – how to raise awareness of local inhabitants about those unique wooden structures, vanishing from Tokyo's urban scene, how to preserve the unique urban character?



▲ Wooden architecture, Kalnciema street in Riga



▲ New buildings in Nakameguro, Tokyo

農村集落2プロジェクトを語る –第1回プロジェクト座談会–

Talk about Takayama and Gokayama PJs

– Round-table talk about PJ vol.1–

text_muramoto

研究室内のPJに共通する点、それぞれに固有な点を議論することでPJを違った視点から捉えてみようという企画です！記念すべき第1回は、農村集落でのエリアマネジメントに取り組む高山と五箇山の2PJから代表としてM1の大森・安東の2名にお互いのPJについて語りあっていただきました！



▲急斜面に形成された長倉集落(高山)



▲3メートル近い雪に覆われる相倉集落(五箇山)

text_omori

両プロジェクトに共通する魅力は、冬の厳しい気候や斜面地の生活の中で培われた生活の知恵と、それを築き上げた歴史です。生活・家事の細かな工夫から、集落をマネジメントしていくための実に合理的なシステムまで、長い歴史の中で形成されていったもので、都市とは大きく異なる文化として確立しています。集落周辺の自然・景観も大きな魅力です。五箇山の場合、周辺の山も世界遺産のバッファゾーンに指定されて、保全が図られていますが、決して自然のままというわけではなく、古くからの茅場など生活物資の供給の場としての面を持ちます。

高山の長倉集落から見える雄大な山々も、実は長い歴史の中で、人の手が入っており、そうした文化的景観も含めての集落保全が肝要だという点で、両プロジェクトは一致しています。

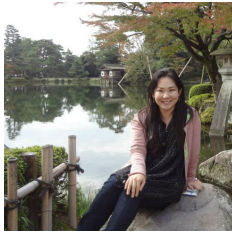
逆に、両プロジェクトで共通する課題は、集落の人口減少です。伝統的な産業が成り立たなくなった今、公務員や農協職員など集落外の仕事につき、個人用の農作業のみを細々と行っている場合が多く、集落の伝統のお祭りや行事なども維持することが難しくなっています。住民との会議を持つことも多くありますが、学生側もなかなか明確な答えが見いだせず、苦悩することもあります。ちなみに、五箇山は民宿や土産物屋といった観光産業で生活を支えている家もありますが、高山の長倉集落は一般的な農村集落であり、観光で訪れる人は少ない状況です。農村体験やエコツーリズムなど、新しい観光の試みも始まっていますが、課題も多く、かつての秘境、近代化の中で人口流出と存続の岐路に立っていると言えます。



研究生 Ilze Paklone

研究室への置き手紙（博士編）

Message for the lab. members from 3 Dr.s!



南 知賢

Nam Jee-hyun

カーン タリク
マハブブKHAN Tariq
Mahbub

傅 舒蘭

FU Shulan

博士号取得論文一覧

南 知賢	The method of Urban Convection and Integrated Historical Settings with Reuse of Collective Industrial Heritage in Treaty Port Cities -Focusing on the Urban Conflicts in Jemulpo of Incheon
KHAN Tariq Mahbub	Study on the Spatial Structure and Process of Transformation in the Pre-Mughal area of Old Dhaka through Socio-physical interactions
傅 舒蘭	中国・杭州における「山水都市」の創生に関する都市計画史的研究 ー西湖の風景を都市に取り込む都市計画プロセスを中心としてー

編集後記

編集者の思いつきのみで、特に節目なわけでもないのに拡大版でお送りさせていただいた3月「10」日号、いかがだったでしょうか？(大幅に発行が遅れてしまい申し訳ありません…)3月10日号として、やはりあらためて触れておきたいことは東日本震災のことです。僕自身は2011年、大槌や佐原といった今回の震災で大きな被害を受けたまちに関わらせていただきました。大槌は半年、佐原は1年で卒業とともに研究室の活動からは抜けさせていただくということで、非常に中途半端で申し訳ないという思いを持っています。また、たとえ1年という限られた短い期間であっても、もっと多くのことが出来たのではないかと、自分の甘さを痛感しています。ただ、まだ1年です。社会人になっても、むしろなったからこそ、震災からの復興、また他都市が震災を受けても今回と同じ課題に直面しないように、自分が出来ることはいくらでもあるのではないかと、という思いを胸に、この1年間、震災を受けたまちと向き合ったという経験を忘れず、「3.11」を風化させることなく、精進していきたい所存です。

さて、卒業旅行と称して東地中海をめぐるしてきました。なかでもクロアチアのドブロブニクは、アドリア海の青い

1月12日(木)の最終論文審査会にて発表の機会を頂きました。審査会を通じて、論旨に適した言葉を選択することの重要さを悟り、また理解しやすい構成と意思伝達力という部分でもっと頑張らないといけないと感じました。

発表では、論文で扱った用語の定義を明快に説明できなかったことが悔やまれますが、先生方の意見は今後も学びつづけていくにあたって、良い機会となりました。

Pursuing a doctoral research is a both stressful and enjoyable experience. It has been a great journey, just like climbing a mountain, step by step, accompanied with bitterness, hardship, frustration, encouragement and trust and with so many people's kind help. When I found myself at the end as I prepare for the next chapter in life, I realized that it was, in fact, teamwork that got me there. I was very nervous before my defense but after the starting I gradually regained my confidence and finally it was not that bad I believe from the comments of the committee members. I guess that is the beauty of it all, you work hard for it and earn the achievement, and you

When I received the editor's request to write about my doctor thesis and my life in UD lab in 300 English words, I felt it is an impossible mission since it is always a long and tough story for everyone who finally got their Ph.D., those who are interesting at my story can read the afterword in my thesis. But if there is something I want to share with other students who are still fighting, then I can compress my experience in three short terms: to be focused, to be patient, and discuss often with those people who are really interested in your topic.

次号の修士学生に先駆けて(?)博士号を取得した3名からの論文審査会の感想、研究室へのメッセージです！

色々な質問が出たとき、その瞬間に悩んで思ってきた自分の考えが、返事として自動的に口から出るので、論文書いている段階から少しずつそういう予想質問と答えに対する考えを整理しておくことも大事と言えます。

論文を書く過程は段階的選択を通じた、主観の客観化過程だということが分かるようになりました。先生皆様に心から感謝申し上げます。

feel such a euphoric feeling of happiness and sense of accomplishment that is only temporary as a feeling, but permanent in terms of a lifetime of confidence in your ability to achieve this and any other goal going forward simply by thinking about this event in time. Finally I would like to express my sincere gratitude to my supervisor Professor Yukio Nishimura, Associate Professor Aya Kubota, Mr. Takefumi Kurose, Dr. Setsuji Nagase, Dr. Christian Dimmer and all present and past members of our Urban Design Laboratory for their kind support and encouragement throughout my study and life here in Tokyo. I am definitely going to miss you all.

And about my 3 and a half years' life in UD lab, it is also a rich and colorful long story. I got almost everything I looked for when I came here, a much more open and wide sight to see the world, a much clearer thinking about my future career, and visiting experiences to a lot of different places in different culture. Also, I learned of people from all of our lab members by working, traveling, and even sometimes quarreling. But there are still a lot of things I need to learn, so I might stay a little longer in UD lab to be ready for another new step.



▲飛躍的な復興を遂げたドブロブニク

3月の予定 Information	
3月18～19日	清水PJ現地調査
3月21日	研究室大掃除
3月22日	学位記授与式&追いコン
3月23日	学部卒業式